

「閉ざされた墓から」

(イエスの埋葬)

マルコ15:42-47

挽地茂男

2019.9.29 日本基督教団千歳丘教会

「おくりびと」という映画があります。この映画は「納棺師」(亡くなった方のご遺体を棺に収める仕事をする人)を主人公にした映画で、(第81回)アカデミー賞の外国語映画賞、(第32回)モントリオール世界映画祭 グランプリ、(第32回)日本アカデミー賞で最優秀作品賞を含めた十冠を達成するなど多くの賞を受賞した作品です。本木雅弘が主演しています。

主人公の小林大悟はプロのチェロ奏者として東京の管弦楽団に席を置いていましたが、ある日突然楽団が経営難から解散し、夢を諦め、妻(美香/広末涼子)とともに田舎の山形県酒田市へ帰ることに



なりました。就職先を探していた大悟は、新聞で「旅のお手伝い」と書かれたNKエージェンツ(NK=No-Kan)という会社の求人広告を見つけます。会社の名前からしてもっきり旅行代理店の求人と思い込んだ大悟は、「高給保障」や「実労働時間僅か」などの条件にも惹かれて面接に向かいます。面接した社長(山崎努)は履歴書もろくに見ず「うちでどっぷり働ける？」の質問だけで即「採用」と告げ、名刺まで作らせます。大悟はその業務内容が実は死への「旅立ちのお手伝い」であり、具体的には納棺、つまり亡くなった方のご遺体を棺に収める仕事と知って困惑しますが、強引な社長に押し切られる形で就職することになります。しかし妻には「冠婚葬祭関係」としか言えず、妻は結婚式場に就職したものと勘違いして

しまいます。入社早々、納棺の解説DVDの遺体役をさせられ散々な目に遭い、さらに最初の現場では、夏場に孤独死して二週間を経過した高齢女性の腐乱屍体の処理を任され、大悟は仕事の厳しさを知ります。

それでも少しずつ納棺師の仕事に充実感を見出し始めていた大悟でしたが、噂で彼の仕事を知った幼馴染の銭湯の息子の山下(杉本哲太)から「もっとまじな仕事に就け」と白い目で見られ、妻の美香にも「そんな汚らわしい仕事は辞めて」と懇願されます。大悟は態度を決めきれず、それに腹を立てた美香は実家に帰ってしまいます。さらに、ある現場で不良学生を更生させようとした列席者が大悟を指差しつつ「この人みたいな仕事して一生償うのか?」と発言したのを聞いたことを機会に、ついに退職の意を社長に伝えようとしますが、社長がこの仕事を始めたきっかけや独特の死生観を聞き、思いとどまります。

場数をこなしそろそろ一人前になった頃、突然美香が大悟の元に戻ってきます。妊娠を告げられ、再び納棺師を辞めるよう迫られた

大悟に仕事の電話が入ります。それは、一人で銭湯を切り盛りしていた山下の母、ツヤ子(吉行和子)の納棺の依頼でした。山下とその妻子、そして自分の妻の前でツヤ子を納棺する大悟。その細やかで心のこもった仕事ぶりによって、彼は妻の理解も得、山下とも和解します。

亡くなった方のご遺体を棺に収め、別れの場に立ち会い故人を送る。ただそれだけのことなのです。しかし納棺師がご遺体を丁重に扱うその細やかな所作に死者に対する真の敬意を見取った人たちは、亡くなった一人の人の人生の重み、その人生の紆余曲折を思いながら、一緒に生きた人に対する優しい愛情に満たされていきます。一つの死を通して、人は一つの人生を見つめ直し、また自分の人生を見つめ直し、新たに人(人生)との出会う可能性を与えられます。



映画に出てくるある納棺式の場面では、妻の納棺式に納棺師の到着が遅れて、激怒した主人が納棺師に向かって怒鳴り散らします。しかし、納棺を終えた後、涙しながら「あいつ今までで一番綺麗でした」と感謝と謝罪を伝えます。

そんなある日、大悟の元にすでに亡くなっている母宛ての電報が届きます。それは大悟が子供の時に家庭を捨てて出て行った父(淑希)の死を伝えるものでした。「今さら父親と言われても…」と当初は遺体の引き取りすら拒否しようとする大悟に、自らも帯広に息子を残して男に走った過去があることを告白したNKエージェントの事務をしている同僚の上村(余貴美子)は「最後の姿を見てあげて」と説得します。美香の勧めもあり、社長に車を借りて遺体の安置場所に向かった大悟は、30年ぶりに対面した父親の納棺を自ら手掛けます。

さて主イエスのご遺体です。「放っておいてもいいんじゃないですか。どうせ復活するのですから。」それは主イエスに愛情のかけらも感じたことのない人の発言です。でも実際、放って置くとどうなったの

でしょうか。ヨハネ福音書がその辺の情報を伝えてくれます。ヨハネ福音書19章31－37節。

「19:31 その日は準備の日で、翌日は特別の安息日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架の上に残しておかないために、足を折って取り降ろすように、ピラトに願い出た。19:32 そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた最初の男と、もう一



人の男との足を折った。19:33 イエスのところに来てみると、既に死んでおられたので、その足は折らなかった。19:34 しかし、兵士の一人が槍でイエスのわきを刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。19:35 それを目撃した者が証ししており、その証しは真実である。その者は、あなたがたにも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている。19:36 これらのことが起こったのは、『その骨は一つも砕かれない』という聖書の言葉が実現するためであった。19:37 また、聖書の別

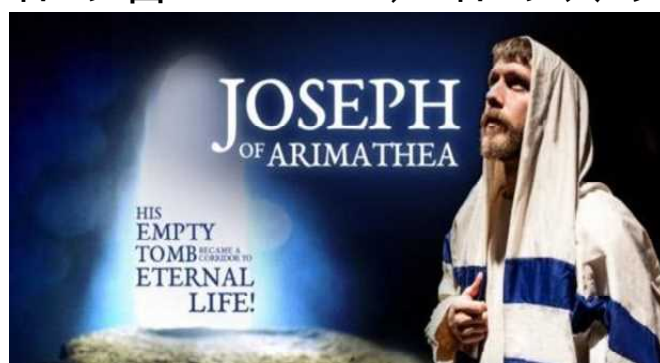
の所に、『彼らは、自分たちの突き刺した者を見る』とも書いてある。」

この日は特別な事情がからんでいました。翌日は安息日、しかも特別な安息日——過越祭期間中の安息日——で、律法の規定(申命記21:22-23)で、屍体を野ざらしにしておく訳にはいかなかったのです。主イエスはすでに死んでいたので足の骨を折らなかったと言われています。ということは、足の骨を折られた他の2人の受刑者にはまだ息があったと(生きていた)ということになります。十字架刑は、ふつうさらし者にするのが目的ですから、生きたまま途中で十字架から下ろすということはないのですが、何かの理由で十字架から降ろす必要がある場合には、足を折って歩行不能の状態にしてヒンノムの谷の屍体の廃棄場に捨てた(放置・遺棄した)のです。このヒンノムの谷は、エルサレムの南西部にある峡谷で通称ゲヘナと呼ばれます。旧約時代に異教の神モレクに子供を捧げて、火渡りをさせたり、子供を焼き殺したりする、幼児犠牲が盛んに行われた場所なのです。後には、町の汚物や動物・罪人の死体が焼却されたことから、死後罪人が罰せられる場所、す

なわち〈地獄〉の同義語となります。

〈ゲ〉はヘブライ語で谷という意味です。ゲ+ヒンノム(גֵּהֶנּוֹם) = 「ヒンノムの谷」が音便化して〈ゲヘナ(ゲヘナ)〉になります。邪惡な者たちを罰するための火が燃えている場所、生きていようがすでに死んでいようが、そこが受刑者の体が行き着くところなのです。安息日が近づいています。受刑者の体を取り下ろさねばなりません。もちろん主イエスの遺体も、取り下ろさなければなりません。明日は特別な安息日なのです。そして取り下ろした体はエルサレムの城外のヒンノムの谷(ゲヘナ)に遺棄することになるのです。足を折られた囚人も、息のあるままその谷に遺棄されるのです。

ユダヤの安息日は金曜日の日没から始まります〔明けるのは土曜日の日没です〕。主イエスが絶命された金曜の午後3時ですから、日没が午後6時だとすれば〔2019年04月01日、日の出 06:27:21AM / 日の入り



06:58:29 PM／日長 12h 31m 8s 〕、あと3時間しかありません。しかもマルコは「既に夕方になっ」ていたと伝えます。3時間もありません。なんとかしなければなりません。42－43節。「15:42 既に夕方になった。その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、15:43 アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。この人も神の国を待ち望んでいたのである。」一人の議員が勇気を出しました。この「勇気を出して」という表現はマルコにしかありません。とても含みの多い表現です。時間が迫って来る。このままだと、主イエスの体がヒンノムの谷に捨てられる(放棄される)。どうしようか、考えても焦る気持ちがつつのるばかり。男性の弟子たちは一人もいません。すべて逃げてしまっていました。しかし、いたとしてもガリラヤ訛で、ご遺体の取り下げをお願い出れば、自分の身に危険がおよびます。今近くにいるのはガリラヤから



主イエスに従ってきた女性たちだけです。アリマタヤのヨセフは「勇気を出し」ます。アリマタヤという地名には不確定な要素もあるのですが、エルサレムから北へ10.8キロに位置するラマタイム・ツォフィム〔通称ラマ〕だと言われています。訛は問題ありません。ヨセフはピラトの許にまいます。

さて今日初めて登場したこのヨセフはどのような人物だったのでしょうか。このヨセフについて四つの福音書が伝える情報を総合するとこのようになります。彼は(1)金持ち(マタイ)で、(2)身分が高く(マルコ)、(3)善良な正しい人(ルカ)で、人の主張が間違っていたり不当な場合は、(4)同僚の決議や行動にも同意しなかった人で(ルカ)、〔おそらくサンヒドリンの〕(5)議員(マルコ、ルカ)の1人で、(6)神の国を待ち望んでいました(マルコ、ルカ)。しかもマタイとヨハネは、彼が(7)イエスの弟子(マタイ、ヨハネ)だったと伝えています。そしてヨハネが伝えるところによると、アリマタヤのヨセフは、ユダヤ人を恐れて、自分がイエスの弟子であることを隠していたのです。隠れキリシタ



ンだったのです。しかし主イエスの遺体が処分されるまでもう時間がありません。自分の身をかばっている場合でしょうか。もう夕方です。日が沈むまでが勝負です。ヨセフは「**勇気を出して**」総督ピラトの許にまいります。そして「**イエスの遺体を渡してくれるようにお願い出**」しました。

それを聞いてピラトは驚いたようです。44－45節。「**15:44** **ピラトは、イエスがもう死んでしまったのかと不思議に思い、百人隊長を呼び寄せて、既に死んだかどうかを尋ねた。15:45** **そして、百人隊長に確かめたうえ、遺体をヨセフに下げ渡した。」「不思議に思い**」という翻訳は少し弱すぎます。この言葉は、主イエスの奇跡を目撃した群衆が「驚いた」という時の「驚く」という言葉です。ピラトの「驚き」には自責の念が含まれています。釈放すべき人を

死なせてしまった。「えっ。死んでしまったのか。」小さな決定と思っていることが、大きな事態につながっていくことがあるのです。手を洗って主イエスの処刑と自分は関係が無いことを表明したものの、後味はよくありませんでした。今朝くだした決断の結果が、今出てきたのです。100人隊長に死亡を確認させた上で、遺体を下げ渡しました。特例でした。ピラトはゲヘナに廃棄するはずのイエスの屍体を、ヨセフの嘆願を受けて下げ渡したのです。ピラトはせめて屍体だけでも人間的に扱いたかったのでしょうか。わかりません。

キリスト教には、ピラトについての正反対の二つの伝承が残っています。その一つはピラトが自殺したという「自殺説」です。紀元3－4世紀の人で「教会史の父」と呼ばれる教会歴史家のエウセビオス(260頃-339)はその『教会史』という著作の中で、ピラトが(第三代ローマ)皇帝カリグラ帝によ



ってガリアに流され、そこで自殺したという伝承を伝えています（エウセビオス『教会史』Ⅱ7）。もう一つは「聖人説」です。このイエスの事件の後ピラトは自分の罪を悔いてキリスト教に改宗し、熱心な信徒となったという伝承が東方諸教会（コプト正教会、エチオピア正教会）に保存されています。東方諸教会ではピラトを聖人とし祀ります。いずれが正しいのか、判断もつきませんが、いずれにしましても、主イエスの死が、ピラトの後の生涯と深く結びついているような気がしてなりません。

さて下げ渡されたご遺体を前にして、ヨセフはホッと胸をなで下ろしたことでしょう。主イエスのご遺体は廃棄される寸前だったのです。安息日がそこまでせまっていたのですから、**ヨセフは絶妙のタイミングで申し出を行ったのでした。**でもご遺体の下げ渡しを受けただけで、ホッとばかりもしている訳にはいきません。やることはまだあるのです。しかも安息日までのカウントダウンが始まっています。納棺師がするように、主イエスのご遺体を、丁寧に拭き清

め死に化粧をしている時間も、永久の別れを惜しみ、お弔いに長時間を使うことも出来ないのです。

では墓は？。そうです。墓はどうするのか。このあとご遺体を納める墓はどうなるのでしょうか。ガリラヤ生まれの主イエスにとって、エルサレムに地所（自分の土地）をもち、墓まで用意してあることなど想像も出来ません。当然、今から墓の購入などと、悠長なことをしている時間は無いのです。マタイ福音書は、その墓についてこう報告しています。マタイ27章60節。ヨセフは主イエスのご遺体を「**岩に掘った自分〔ヨセフ〕の新しい墓**」に納めた。ヨセフはエルサレムに自分の墓を所有していたのです。おそらく彼は、ピラトの許に遺体の下げ渡しを願い出る時には、頭の中ですでに、この墓を使おうと考えていたのでしょう。



いよいよ主イエスのご遺体を、その墓に納める段階です。46節。

「15:46 ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。」十字架から主イエスのご遺体を取り下ろし、その後、遺体を墓まで搬送する作業を行ったのは、おそらくヨセフと彼の使用人たちでしょう。しかしヨハネによる福音書は、十字架から取り下ろして亜麻布で巻いて、墓に納めるまでの間に意外な人物の登場を知らせます。ヨハネ19章39節。「19:39 そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香じんこうを混ぜた物を百リトラばかり持って来た。」あの夜中に主イエスの許



に教えを請うためにやって来たことのあるニコデモが姿を現したのです。手には百リトラの

「没薬と沈香の混ぜ物」（おそらく軟膏／クリーム状のもの）を持っていました。1リトラが約32

6gですから、百リトラで、32,600gつまり32,6kg。相当の量です〔おそらく使用人に運ばせたのでしょう。標準的な大きさの500g入りのシャンプーであれば64本分〕。かつて十字架を前にして、主イエスの頭に注がれた純粋なナルドの香油、売れば300デナリオン〔大人の約1年分の労賃〕になるという、あの無名の女が主イエスの葬りの準備として主の頭に注いだ香油の量が1リトラですから（マコ14:5／ヨハ12:3,5）、ニコデモは、その百倍の量のクリーム（軟膏）を持参したのです。1人分としては法外に多い量です。ニコデモは慌てていたのでしょうか。冷静に考えれば、そんなに大量にはいらぬことくらいわかったと思うのですが。冷静になど考えていられる状態ではなかったのかもしれませんが。居ても立ってもいられず、あるものをひっさげて〔僕に持たせて〕兎にも角にもやって来たのかもしれませんが。彼の気持ちがそうさせたのです。ただ、この尋常ではない「没薬と沈香の混ぜ物」の量は、ニコデモの気持ち、つまり主イエスに対する彼の尊敬や思慕の大きさを

教えてください。ニコデモの主イエスに対する尊敬や思慕から出てくる量としては、相応の量だったのかもしれませんが。量はたっぷりありました。しかし時間がありません。香料を添えて早速にご遺体を亜麻布に包み込みます。

わたしたちの生きる現代の日本のお葬儀は、どんな手順をとるでしょうか。わたしたちの場合、人が亡くなりますと——そこからご葬儀の準備とプロセスが始まっていくわけですが——最初にすることはまずは連絡。親族や関係者に連絡をして、お葬儀の準備を整えていくことになります。そしてまず具体的には、医師の死亡診断書を発行していただいて、病院費用の精算を済ませます。役所への届けも必要です——でないと埋葬の許可が下りません〔主イエスの場合ピラトの決済だけでOKです〕。つぎに喪主(ないし葬儀委員長)を立てなければなりません。〔アリマタヤのヨセフは自ら決意しました〕。そして司式者や葬儀社と打ち合わせて日取りを決めます。ふつう友引を避けます。〔斎場が葬祭業務をやっていません。主イエスの場合は選んでいる余地はありませんでした〕。お手伝いをしてくださ

る方や身内には、やるべきことや仕事の分担を連絡することにも必要になります。司式者は葬儀の内容をご親族、葬儀社と相談しながら最終決定します。〔ヨセフは僕たちに最小限の指示を与えます〕。さてご遺体の引き渡しです。その前に、最近の病院ではかつての湯灌にあたるエンゼルケアが看護師によって施され、身支度が調えられます〔主イエスには時間がありません〕。移動の準備が整いました。いよいよ寝台車を使って、葬儀の会場に安置するか、あるいは、一端ご自宅に戻ります〔主イエスのご遺体は墓に直葬です。主イエスの葬送についてはこれでタイムリミットです。あとは何も出来ません〕。一般のご葬儀ではこれからが本番です。葬儀を催して、故人の人生を振り返り、ともに過ごした来し方を偲び、その出合いに感謝する。神の守りと恵みを



感謝し、神の御許にある豊かな慰めと平安を祈りつつ、納棺式、葬儀、火葬前式、火葬、そしてのちの納骨をもって、故人を神のみ手に委ねます。主イエスは、1人か2人の少数の弟子の手によって、日没を前にして手早く、ヨセフの所有する墓の中に安置されました。そして彼らは「**墓の入り口に(は)石を転がしておいた**」のです。

アリマタヤのヨセフは〔そしておそらくニコデモも〕、大役をなし終えました。一方で、その大役の一端を担いたいと思いつつ、担いえないでいた人たちがいました。主イエスのご遺体を手厚く葬りたいと切望していた婦人たちが居ました。イスラエル北部のガリラヤの田舎から、不案内な(不慣れな)エルサレムという首都にやって来て、自分の敬愛する指導者・師を失い、何をどうしていいかも分からず、右往左往するしかなかった婦人たち。今はただ主イエスへの思慕の念だけが彼女たちを動かします。その思いだけが彼女たちの導き手だったと言ってもいいかもしれません。マルコは名残を惜しむ彼女たちの視線を文章に残しました。47節。「**15:47 マグダラのマリアとヨセの母マリアとは、イエスの**

遺体を納めた場所を見つめていた。」この「**見つめていた**」はもう少し強い言葉です。この動詞(θεωρέω セオレオー)は英語のセオリー(theory)つまり理論という言葉の元の言葉なのです。「じっと見つめる」「よく観察する」という意味です。理論というものは「じっと見つめる」ところから、また「よく観察する」ところから出てくるものなのです。もう一度47節。「**15:47 マグダラのマリアとヨセの母マリアとは、イエスの遺体を納めた場所をじっと見つめていた。**」

その眼差しが3日後、安息日の明けた週の初め日の彼女たちの行動につながるのです。彼女たちのその行動は次のように報告されています。

16章1-2節。「**マル16:1 安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。**

16:2 そして、週の初めの日のごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。」





アブラハムの埋葬(創25:7-8)

主イエスがなくなった3日前の金曜日からずっと、彼女たちは、そのご遺体のそばにいたかったのです。そして最後のお別れをすることを願っていたのです。

故人を大切にし、そのご遺体を注意ぶかく大切に扱うことは、古代(後期の)ユダヤ教にとっては、非常に重要であり、そのような姿勢が聖書の周辺に成立する外典の伝承の中にも反映しています。その伝承は、アブラハムの遺体を天使が世話をしたと語ることによって、その死を別格のものとして語ります。まさにアブラハムのご遺体に施されたエンゼルケアです。

「そして天使たちは、アブラハムの高貴な魂を、自分たちの手の中で、神の編んだ亜麻布にくるんだ。そして天使たちは、死後3日目の日まで、義人アブラハムの遺体に、神の軟膏と香料を塗って世話をし

ました。そして天使たちは、アブラハムを約束の地に埋葬しました」(「アブラハムの遺訓」T.Abr.20:10b-11. 成立は紀元2世紀と推定)。死後3日間、埋葬するまでの間、天使がアブラハムのご遺体に寄り添い、手厚く世話をしたと記されています。「天使たち」や「神の編んだ亜麻布」「神の軟膏と香料」といった神話的な表現は、アブラハムの死がどれほど尊いものと考えられていたかを表します。と同時に、ここには大切な人を葬る際の当時の「喪の作業」の一端が垣間見えます。婦人たちも主イエスの体に香料を塗り、主イエスの生涯を偲び、その教えと愛とを思い起こしつつ、再び心を温められつつ、しっかりお別れをしたかったのでしょう。香料を買い、週の初めの日つまり日曜日の朝一番に、墓に出かけていきました。彼女たちの眼差しには、すべき世話ができなかった慚愧の念と、週明けにはなんとかできるという淡い期待がこもっていたのでした。

最初に紹介した「おくりびと」の原作者〔最終的には作品の解釈の違いから、原作者を辞退〕である青



しんもん
木新門は原作『納棺夫日記』の中で、自分が経験した死についての原体験をこう書いておられます。「私が父母に連れられて旧満州（現中国東北部）へ渡ったのは四歳の時である。終戦は八歳であった。／現地で生まれた妹と弟は、引き上げを待つ難民収容所で次々に死んでいった。母も発疹チフスで死んだようになっており、知らないおばさんと一緒に、多くの屍体が積んである所に妹と弟の死骸を捨ててきた記憶が今も鮮明に残っている。」著者は、捨てられるしかなかった体をもう一度取り上げるようにして、納棺師としてご遺体の一体一体に思いを込めるようになっていきます。

捨てられるはずだった主イエスの体。その体を大切に取り上げる喪の作業は、隠れキリシタン(弟子)・ヨセフの自分の社会的立場もかけた、信仰の業としてなされました。ご遺体はもう、いまは閉ざされた墓の中にあります。わたしたちの信仰の大

切な要素である「復活」の信仰を一旦停止してください——強い言葉で申し上げれば、「一旦捨ててください」。閉ざされた墓の内外に漂う「喪の空気」を十分に感じたいと思います。

その時、わたしたちも主イエスのその死せる体の来し方を思い、その生涯に表された神の御業を確認し、不十分になされたがゆえにわたしたちの参与を残している喪の作業を、主イエスを慕う婦人たちと同じ思いをもって、あの「信じられないメッセージ」がわたしたちに届くまで、静かに主の死を思いましょう。

わたしたちの心には、感謝と賛美の思いが湧いてこないでしょうか。わたしたちのために、十字架でその救いの御業を全うしてくださった主イエスとともに、また、新しい一週間を歩み出しましょう。祈ります。

2019.9.29 日本基督教団千歳丘教会



15:42 既に夕方になった。その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、

15:43 アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにお願いした。この人も神の国を待ち望んでいたのである。

15:44 ピラトは、イエスがもう死んでしまったのかと不思議に思い、百人隊長を呼び寄せて、既に死んだかどうかを尋ねた。

15:45 そして、百人隊長に確かめたうえ、遺体をヨセフに下げ渡した。

15:46 ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。

15:47 マグダラのマリアとヨセの母マリアとは、イエスの遺体を納めた場所を見つめていた。

15:42 Καὶ ἤδη ὀψίας γενομένης, ἐπεὶ ἦν παρασκευὴ ὃ ἐστὶν προσάββατον,

15:43 ἐλθὼν Ἰωσήφ (ὁ) ἀπὸ Ἀριμαθαίας εὐσχήμων βουλευτής, ὃς καὶ αὐτὸς ἦν προσδεχόμενος τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ, τολμήσας εἰσῆλθεν πρὸς τὸν Πιλάτον καὶ ᾔτήσατο τὸ σῶμα τοῦ Ἰησοῦ.

15:44 ὁ δὲ Πιλάτος ἐθαύμασεν εἰ ἤδη τέθνηκεν καὶ προσκαλεσάμενος τὸν κεντυρίωνα ἐπηρώτησεν αὐτὸν εἰ πάλοι ἀπέθανεν·

15:45 καὶ γνοὺς ἀπὸ τοῦ κεντυρίωνος ἐδωρήσατο τὸ πτῶμα τῷ Ἰωσήφ.

15:46 καὶ ἀγοράσας σινδόνα καθελὼν αὐτὸν ἐνείλησεν τῇ σινδόνι καὶ ἔθηκεν αὐτὸν ἐν μνημείῳ ὃ ἦν λελατομημένον ἐκ πέτρας καὶ προσεκύλισεν λίθον ἐπὶ τὴν θύραν τοῦ μνημείου. 15:47 ἡ δὲ Μαρία ἡ Μαγδαληνὴ καὶ Μαρία ἡ Ἰωσήτος ἐθεώρουν ποῦ τέθειται.